

特集 齊藤町長

就任3年目を振り返る

**もうこれで満足だという時は、
すなわち衰える時である。**

渋沢 栄一

明治・大正期に活躍し、NHK大河ドラマ『晴天を衝け』の主人公である渋沢栄一の言葉です。未だに収束しない新型コロナウイルス感染症や頻発している自然災害のリスクなど、まさに未来は予測不能と言えます。そんな時代に、我々は生きています。先日公表された国勢調査の速報値によると、余市町の人口は前回よりも8.1%減少しました。日本全体でも人口減少が進んでおり、今後、オンラインを本格的に取り入れて、少ない労働力でも回る社会を構築する必要があるでしょう。

こんな時こそチャレンジを

先日、10年に1度の総合計画策定に伴い、町民の皆さんと役場とで行っているまちづくり協議会から「人づくり」が未来の余市町に必要であるとの提言をいただきました。冒頭の渋沢栄一の言葉にあるように、成長を続けられない社会は衰退し潰れていきます。これまでの常識がくつつがえる大きな変化の波は、すべての組織や活動において、これまで当たり前だったことを見直して、未来から見て最適な方法に変える必要があるのではないのでしょうか。先のまちづくり協議会の提言の「人づくり」ですが、現時点で針の穴を通すように精密に未来の余市町を予測し、今なすべきことにチャレンジする「人づくり」が必要でしょう。



3年目の振り返り

早いもので就任から4年目を迎えました。昨年の振り返りを見直してみると、新型コロナウイルス感染症の話題について書いていましたが、残念ながら引き続きこの話題となってしまいました。余市町の解決すべき課題は山積みですが、本年度の大目標は、新型コロナウイルス感染症による社会の混乱を一刻も早く収めることです。この大目標のためには、財政的にも人的にも限られた行政資源をどう活用していくかを考えなくてはなりません。収束後の未来をも描きながら、新たなシステムの導入や既存のものを見直しを進めていく必要があります。

自治体の垣根を越えたワクチン接種「余市モデル」

新型コロナワクチン接種の手法を考える中で、5か町村が連携して一体的にワクチン接種を行う議論を去年の冬からずっと詰めてきました。北後志の他の首長とは日常的に緊密に連絡を取り合っており、本件でもスムーズに合意がとれましたし、役場スタッフも優秀であり、立てた方針を迅速に調整していきました。この仕組みには医療関係者の皆様の協力が必須不可欠であり、成功の鍵は医師会との連携です。余市協会病院、北星余市高校の協力で速度も加速しました。社会の混乱を一刻も早く収める目的で迅速にワクチン接種を進め、12歳以上の町民の85%以上が接種し、ワクチン接種はほぼ完結し、小樽市へもワクチンを融通もしました。ご尽力頂いた皆様には心からの感謝と敬意を表します。



人口減少と広域連携

先述のワクチンの「余市モデル」のような自治体間の広域連携は、消防や廃棄物処理の分野で行って来ていますが、今後人口減少が進んでいく中で、他の分野でも重要性が増してくることでしょう。今すぐという話ではないですが次に述べる斎場もそうでしょうし、防災は広域で支えあうことが最も安心ではないでしょうか。防災については、備蓄品の在庫数や賞味期限などの管理を紙からデジタルに変更しました。これにより職員の負担軽減、賞味期限切れの見落とし防止など、効率的な防災マネジメントが可能になりますし、将来的には自治体の垣根を超えた避難計画の見直しなど、より深い連携が実現できるようになると考えています。



町営斎場については場所の決着へ

昨年の振り返りで謝罪を述べさせていただきました町営斎場ですが、本年度は傾いた墓地の修正を行うため工事は進展しません。他方で、斎場の老朽化はもう限界であること、現在の位置の安全性の問題、そして人口減少下での将来的な広域連携にも対応できる場所を織り込んでおく方が合理的であるという観点から、現在の位置がふさわしいのかどうか、立地の移転も念頭に置きつつ調査を行う事としました。早期にどの場所が適切か決着をつけたいと思えます。

道の駅に関しては、インターチェンジ付近が適切との結果を踏まえ、その付近が建設できるエリアかどうか地質調査中です。もちろんこの調査にも予算がかかりますが、これは経済産業省の補助金などを活用しています。

並行在来線「余市-小樽」間は別途協議へ

2030年の北海道新幹線の札幌延伸に伴い、経営分離に同意している並行在来線については、全線を3セク運営かバス転換かの選択肢しかなかったのですが、余市-小樽間については乗降客数が多い(輸送密度が1日2,000人程度と、帯広-釧路間より2倍近く多い)ことから、この部分を切り離して協議するというにしてもらいました。先人が整備し、利用の多い鉄路は具体的な数値データに基づいて合理的検討をすべきと主張しています。

HPVワクチンの積極的情報提供

最近紙面などで「HPVワクチン」の文字を目にすることが増えました。HPV(ヒトパピローマウイルス)ワクチンは、子宮頸がん予防を主な目的としたものです。子宮頸がんは毎年約1万人が罹患し、約2,800人が亡くなっています。世界をみると、先進国では接種率が80%にも達し、「子宮頸がんは過去の病気」と言われていますが、日本では接種率が0.8%と、日本がいかにも遅れているかを物語っています。私自身、HPVワクチンを接種していますし、HPVは性別問わず感染するため、先進国では、男性への接種も当たり前に行われています。

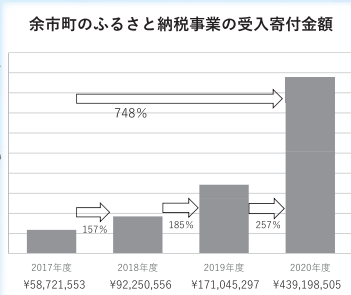
余市町を含む各自治体で現在、小学校6年生から高校1年生相当の女子を対象に無料で定期接種を行っています。余市町は、無料接種の対象者が子宮頸がん、そしてワクチンに関する情報不足により、接種機会を失って欲しくないとの思いから、今年度の町政執行方針に「対象者への無料接種の積極的な情報提供」を盛り込み、実行しています。30歳から45歳までのワクチン非接種女性に対しても、希望があればHPV検査キットを提供していく予定です。



出典 国立がん研究センター がん情報サービス 2015年全国推計値に基づく累積罹患リスク、2017年累積死亡リスクより

大切なお金の問題

予算についても触れさせていただきますが、余市町の財政状況は率直に言って厳しい状況です。先日にも急に温水プールが安全性の問題で使用不可能になりましたが、建て替えるとなると10億程度の資金が必要になります(余市町の一般会計予算は90億程度)。プール以外にも老朽化している建物を多く抱えているのはご存じのとおりだと思います。もちろん全て新調できればそれに越したことはないのですが、優先的に考えていく必要があります。お金が無い場合どうするか。支出を減らすか、収入を増やすかの2択しかありません。過度に支出を減らすことはかえって将来的な負担を増やすことにもなりかねないことから、私は、「町の持ち出しの」支出を減らし(支出自体は変化しない)、収入を増やすというやり方をしています。何度か説明したことがあります。町の持ち出しを減らすために予算をできる限り国庫支出金等に振り替えています。収入を増やすことに関しては、ふるさと納税が私の就任時の5,900万円から昨年は4億3,000万円へと約7.4倍に伸びまし



た(後志管内での順位が9位から3位にランクアップ)。今年は現時点で昨年の3倍近くの伸びになっており、10億円も夢ではありません。

水道事業について考えなければならない時期

町民の皆様にご覧いただきたい論点として水道の話があります。よく余市町の水道は高いとの話を聞きますが、現在の余市町の10㎡あたりの料金は2,636円です。この金額は人口規模が同程度の自治体と比べて同水準(例:深川市2,596円、当別町2,893円など)ですが、上流域の水が綺麗な倶知安町や京極町や大都市の札幌市に比べると高くなっています。

水道事業は町の予算とは切り離れた企業会計(独立採算制)を取っています。水道料金が安くなる要因としては、①大都市など人口が多く規模の経済が働くこと、②上流域等で水質が綺麗であること、③浄水設備が古く減価償却費がかからないこと、が挙げられます。しかし、余市町の場合、①人口は大都市のように

多くはなく、
②最下流域で
水質を上げる
ための浄水に
コストがかか



ること、③浄水場が比較的新しく減価償却費がかかることから、非常に厳しい状況です。

この話は町民の皆さんにはあまり知られていない技術的な話ですが、現在は資本費平準化債という借金を毎年して、借金で借金を返しながらか赤字を回避しているという状況です。しかし、もちろん水道管はどんどん老朽化しますから、更新しないとなりません。また、人口はどんどん減少していきます。このような状況を踏まえてシミュレーションしたところ、借金をせずに手持ちの現金で今ある借金を返しなが水道運営を続けた場合、5年後以降はずっと赤字に転落、今のように借金で借金を返しつ続けた場合でも、9年後以降はずっと赤字に転落という状況になり、水道会計はこのままでは破綻するとの未来が見えています。破綻を回避するためには根本解決に向けた設備の集約化、当面の水道料金の10%程度の値上げなどを考えなければならない時期なのではないでしょうか。この機会に町民の皆様にも余市町の水をめぐる問題について考えていただけたら幸いです。

光陰矢のごとし

この振り返りも3回目ということで、私の任期も残すところあと1年となりました。まさに光陰矢のごとしを実感しております。1年目の振り返りで、1年目に播種、2年目は育苗、3年目に開花という話をしましたが、多くの方にご協力を頂き、3年目までに咲いた花、間もなく芽を出すものもあります。皆様の生活の中に思い当たる花はあるでしょうか。まだまだ実感としてお届けできていないかもしれませんが、もし浮かぶものがあれば幸いです。

そうはいつても、財政状況、人口減少と余市町を取り巻く環境は依然、厳しいものがあります。しかし、優秀な職員、町民の皆様と共に花を咲かせた経験がこれからの余市町を元気づけると信じてやっています。私は残り1年も全力で走ります。変わってゆく町政、そしてまちの雰囲気を感じていただけたらこれ以上のやりがいはありません。引き続き、町政全般に対し、様々なご意見、ご指導を賜りたいと存じます。